

「今日の説教、聴き手のために」 2014/1/5
「このプリントは、説教ごとに作っているものです」
「絶えざる改悛」

明治学院教会(325)
牧師 岩井健作

聖書テキスト ヨブ記 19章 23節—29節 ローマの信徒の手紙 13章 11節—5

- 1、人生には強気の時と弱気の時があります。旧約聖書のヨブも此の両極を生きた人です。息子の「いじめの問題」に強い憤りをもって学校に迫る強い父親が、親としての自分の反省では自分の弱さを深い悩みににじませていた場面が今でも心に残っています。ヨブ記では13章に強気のヨブが描かれます。ヨブの苦難を共有しないまま、偉そうにヨブを責める友人たちの冷たい言説に対して、ヨブは彼らを「無用な医師だ」と強く抗議します。「ドクマティスト（教義主義者）、観念論者」に対して闘う、強いヨブです。しかし19章では「憐れんでくれ、憐れんでくれ、神の手がわたしに触れたのだ（病と苦難のこと）」(21)と人生に滅入る弱気のヨブが描かれています。「言葉を書き留めてくれ」と述べた後、自分を「贖う者が生きておられる」と弱さのどん底から神を求めます。
- 2、内村鑑三は「世界最大の書は何か、それは聖書である。聖書中最大のものは何か。それはヨブ記である」と言って、この19章にヨブ記の絶頂を見えています。明治24年31歳の時、第一高等学校で「教育勅語」に敬礼しなかったので職を追われました。時を重ねて自分の肺炎を看病してくれた愛妻加寿子が肺炎に感染して死去します。強度の精神衰弱、不眠症に陥り、また、親戚・縁者からの厳しい非難にさらされます。こんな中でヨブ記の講義をしたのです。彼は、ヨブ記の神に、強気の人間に対する「義の神」「審きの神」を見ますが、他方で弱気の中で、「仲裁者」「証人」「保障者」「贖う者（ゴーエール）」なる神を見ます。さらには、これを新約のローマ書の「贖罪者キリスト」「憐れみの神」と結びつけます。内村は弱さの中でヨブ記を読んだので、19章が中心になりました。
- 3、しかし、強い傲慢な自分を打たれる神に向かいあいながらも、そこでの「向かいあい」を大事にする読み方をするのは、旧約学者浅野順一氏です。彼は13書15節をヨブ記の中心課題としています。「そうだ、神はわたしを殺すかもしれない。だが、ただ私は待つておられない。私の道を神の前に申し上げよう。」と、神に真向かう実存的な生き方が大事だと述べています。強い時には、自分を打つ神、審きの神、怒りの神に出会い、弱い時には、自分の苦しみと共に立って贖う者に出会うという、この両面を持つのがヨブ記の信仰です。
- 4、強気の時にも弱気の時にも、常に神の前に自分を、神とのかかわりで見つめ直すこと、あるいは神に祈る、聖書の言葉の一つ一つに出会うこと、が大事なのではないでしょうか。自己絶対化を起こさない関わりが自分には与えられていることを信じることです。自分を論してくれるものがあるならば、それは友人であろうと、子どもであろうと、教師であろうと、配偶者であろうと、大切にすべきです。自分に向き合う者のその背後には、「神がいまし給う」事を忘れてはなりません。強気の時も弱気の時も、自己相対化の視座を持ち続けることを、信仰生活の中にプログラム化しているのはカトリック教会の「告解」です。（洗礼を受けた後に犯した罪を、司祭を通じて神に言い表す行為。赦しの秘跡の中心行為。もと「悔悛の秘跡」と呼んだ。[広辞苑]）。プロテスタントは信仰者個人の主体性を大切にするので、「悔悛」を制度化してはいません。神との関係に立ち戻る柔軟性、「改悛」を自己の生き方に絶えず取りもどす事は、各自の責任にゆだねられています。「夜は更け、日は近づいている」（ローマ13:11）という「時（カイロス）」の自覚を促されます。
- 5、ヘンデルは「メサイア」の第三部（第一部預言・降誕、第二部受難・救済）の復活への賛歌のアリアの冒頭をヨブ記19:25-26「私は知っている、私を贖う方が生きておられ・・・」の言葉で始めます。弱さから仰ぐ神への賛美です。今年も我々を取り巻く状況は厳しく、弱さに打ちひしがれる思いをすることがあるでしょう。しかし、神を賛美する生活を確固として持続させてゆきたいと思います。

- 1、 ヨブ記のストーリーを思い出して下さい。ヨブは神を恐れる全き信仰者でした。それにも拘らず、一朝にして、全財産を失い、七人の子供たちと死別し、自身重病に苦しみました。序章、1-2章の物語の結論は「神から幸福もいただいたのだから、不幸もいただくのではないか」(2:10)とのヨブのゆるぎない信仰でした。しかし、不条理の苦難を巡って、三人の友人たちは「因果応報」の固定観念でヨブを責めます。「不条理ではない、どこかで罪を犯しているのだ」と非難します。そこから長い対論のドラマが3章から42章にわたって展開されます。そのテーマの一つに「ヨブはいたずらに(利益もないのに=新共同訳)神を恐れましょうか」(1:9、サタン言葉)という友人たちの御利益信仰こそが信仰の一般的通念だとの考えが披露されます。現に私たちの周りの諸宗教は、健康、入試合格、仕事の成功、家内安全、商売繁盛の神を説きます。しかしヨブ記は不条理を含めて神と対峙するヨブの実存的あり方に、神への関係(13:3)を示しています。21章は、3人の友人との対論を2回づつ繰り返した後の、6回目のヨブの弁論の箇所です。
- 2、 ヨブは、友人たちが何回も固定観念化した言葉でヨブに「説教」するのに我慢がならず、「わたしの言葉を聞いてくれ、聞いてもらうことがわたしの慰めなのだ」(21:2)と訴えます。ここには「聞くことの関係」の大事さが言われています。「あなたがたはくりかえし聞くがよい、しかし悟ってはならない」(イザヤ6:9)とありますが、「聞く」ことは人格的衝撃を大事にすることです。「あ、分かった」と自分の知識の整理棚に納めて満足してはならないのです。ヨブは「我慢して、わたしに話させてくれ。」(21:2)と言います。ヨブは「慄然として、身震いが止まらない」(21:6)この世の現実を友人に訴えているのです。それは6節から13節の「悪人が栄える」この世の姿、そして「われわれはこれ(神)に祈っても、なんの益があるのか」(口語訳21:15)と言いつつ「悪人」の存在のやりた放題の不条理を、3人の友人の綺麗事の「神学的理解」にぶつけています。
- 3、 ヨブ記はその通俗的因果応報の信仰理解、つまり人生の損益計算書に出てくる黒字だけを「益」とする考えを批判します。ヨブ記はこの「益」をしばしば問題にしています。(1:19, 21, 21:15, 34:9, 35:3)。この「益(ヤータブ)」は「助けになる、役に立つ、益になる(商業用語)」という意味で、ヨブ、イザヤ、エレミヤでは殆ど、信仰から見て「益ではない」「役に立たない」という否定的な用い方をされています。イザヤ48:17では主が「あなたを教えて力をもたせ(益)」と肯定的に用いられています。これはアッシリアがバビロニア捕囚のイスラエルを解放する文脈です。つまり、地上の損益計算書を相対化し、天上にまで広げそれを含めた「益」「力」を考えます。元来信仰の「益」とは地上では逆説であり、無益の益であります。私たちは「益」の尺度を少し大きく取るように 信仰の世界へと召されているのではないのでしょうか。「神は・・・万事を益となるようにしてくださることを私たちは知っている」(ロマ8:28)とは、危機におけるよりどころです。

「今日の説教、聴き手のために」 2014/2/2 明治学院教会 (327)

(このプリントは、説教ごとに作っているものです) 牧師 岩井健作

『種は実を結ぶ』 マルコ福音書4章1節-9節。

1、今日は、有名なイエスの「種蒔きの譬え話」からメッセージを聴きとります。

「譬え」(*)は、彼方(神)の真理を、こちら(人間)の経験で体得してもらう伝達の方法です。「種蒔き」の経験がない人には、頭で理解できたとしても、本当に、体では分かってもらえないでしょう。イエスの周りの群衆(オウロス)は、種蒔きの経験のある人達でした。裏を返せば、この譬えはエルサレムの神殿(経済)で生活している学者や祭司には「理解できますか」という批判を含んでいます。私たちも「種蒔き」の経験をしていません。だから、自分の生活の場、「生きてゆく課題」に「再解釈」をして、そのメッセージを聴く必要があるでしょう。母親や保育者や教師は子供が育つという経験で。医師は患者が育つという経験で。管理者は従業員が育つという経験で。牧師は信者(教会)は育つという経験で。また、実際、都市消費生活でも、種を蒔く、育てるという経験は小さなことでも大事でしょう。家庭菜園、保育園・幼稚園・学校などでの、花造り、野菜造り、サツマ芋作りなどです。

(*譬えパラボレーは傍ら・並べて(パラ)、置く、投げ込む(ボレオー)の語意。)

2、私にとっては、この譬えは「信仰の原点」でもあります。何故かといえば、青年前期「種蒔き」の生活で育ったからです。系譜をたどれば、それは賀川豊彦にあります。父岩井文男が銀行員をやめて農村伝道に携わったのは賀川先生との出会いでした。農村伝道の苦労は「種蒔き」の苦労と「実を結ぶ(収穫)こと」の喜びそのものでした。「麦作りは」創造の業と恵みの壮大さを、「サツマ芋作り」は社会の矛盾とその変革の課題を私に教えてくれました。私は、あえて農村教会ではなく、日本では都市の歴史を積んできた教会に招かれたことを自分の召命として、幾つかの教会で、56年間、宣教・牧会に取り組んできました。ずーっと抱いていたどん底の課題は、近代日本のキリスト教の「イエス振舞と言葉とは乖離した」教条化・観念化した「体質の改善」の課題でした。しかし、余りにも大きな課題で、実を結ばない経験の連続でした。ここ8年は、「キリスト教主義学校と教会」という課題を与えられました。皆さんと共に歩みました。最後は下村牧師と共同して「新しい教会像」を提示して見ました。しかし道遥かな思いです。

3、今日のテキストの譬えで言えば「道端に落ちて、鳥が来て食べてしまった。・・石だらけの土の少ない所に落ち・・枯れてしまった。茨の中に落ちた・・実を結ばなかった。」(4-7節)というイエスの言葉が重く心に響きます。しかし実を結ばない種(単数形)のあるのは事実です。しかし8節には「また、ほかの種は(複数)・・」は実を結んだとあります。「福音の前進」の事実です。「神の国(支配)」の実現の事実です。「また」(カイ)という並行的書き方は、「実を結ばない現実」と「種を実を結ぶ現実」が共に存在していることを示します。他の表現で言えば、「実を結ばない現実」が相対化されているのです。「十字架の死」と共に「復活の命の喜び」が示唆されているとも言えるでしょう。種の実りを信じて、めげずに励みましょう。

- 1、新聞の「発言」欄に、ある高校生の「不登校しても自殺しないで」という投書が出ていた。「いじめが原因で自殺する10代が増えている。……無理して学校へ行くよりも、とりあえずは、とにかく生きていてほしいと私は願う」(東京2/12)。きっと、差し迫った問題を抱える友人が身近にいるのだろう。「命の問題」は「とりあえず」対処しなければならないのだ。
- 2、今日の聖書テキストはイエスの譬え話「実のならないいちじく」の話。イエスの時代これとよく似た民話が流布していた。そこでは木は切り倒されてしまう。イエスは此の民話を下敷きに、「とりあえず」「命をぶった切るな」と緊急判断を述べた。
- 3、パレスチナでは、ぶどう園には果樹園のように他の木が植えられていた。7節。このいちじくも、最初の3年間は成長する期間として期待され、猶予されたが、実を結ぶ見込みがない、土地をふさぐだけだ、「ぶった切る」と持ち主は考えた。いちじくは養分を良く吸う。8節。しかし、この園丁(職人)は「肥料をやってみます」と。いちじくの施肥は普通はなされない。畑の経営、ぶどう園の利益よりも、彼は目の前の植物の命からも考えた。長年の人生で身に付けた、職人氣質の思考である。「イエスの物語る出来事はいずれの場合も生の模写である。」(A ユーリヒツヒャー)。効率(お金)から考えるのではなく、自然(命)から考えよ、との基本的命題を含んでいる。
- 4、この譬えを、イエスの内面に踏み込んで関係づけて考えている新約聖書学者がいる。「神の国」を天の祝宴として把握していたのがイエス。「神の国」は天上では実現している。地上ではそうすんなり行かない。イエスの内なる現実と、実際の宣教の局所性との間にギャップがある。つまりこの譬えは、イエス自身の内側の不調和・葛藤を垣間見させる(大貫隆)。「とりあえず、木を切るな」。効率の思考を止めよ。通俗的したり顔の思考を止めよ。「神の国」の到来を願い、祈り、「まず、待て」という「いのち」への思考と行動を「とりあえず」守れという緊急な促しを聞く。
- 5、「いのち」とは神との関わりで保たれる人間の限りない尊厳である。最近の日本の安倍政治は如何に安易に、その命を「ぶった切る」方向へと舵を切っていることか。原発再稼働。憲法9条のなし崩し、集団的自衛権。今、原発企業訴訟が起こされている(私も原告の一人に加わった)。「脱原発」は命の軽視への闘いである。広島、長崎、福島の実実に本当に目を留めれば黙ってはられない。「慰安婦」問題。ユン・ミヒャン氏(韓国挺身隊問題対策協議会協常任理事)は、これは「命」の問題だと、NHK榎井会長の「どこでもあった」との発言を厳しく抗議している。命への暴力の行使について「切るな、まず、待て」との叫びを大事にしたい。

教会内の事にあえて引き寄せて考えれば、「新しい教会像」は、「命」(△ではなく○の在り方)に繋がっていないだろうか。提案を「切って」はならない。育つのを「まず、待とう」。

(このプリントは、説教ごとに作っているものです)

牧師 岩井健作

『見える教会、見えない教会』 エフェソの信徒への手紙1章15節-23節。

「神はまた、すべてのものをキリストの足下に従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です」(22-23節)。

- 1、「教会はキリストの体」というパウロ的表現は「信仰告白」などを通じに馴染んでおられるかと思えます。パウロはこれを「十字架の死に与かること」(ロマ7:4, Iコリ10:116)を含めて、共同体論として展開しています。「体は手と足・・・」の譬えは有名です(Iコリ12:12f, 27)。しかし、パウロより後に書かれた「エフェソ」は「教会はキリストの体」に「キリストが教会の頭である」を加えました。
- 2、「エフェソの書簡」は「パウロの名による書簡(つまり偽書)」(コロサイ、エフェソ、テサロニケ第2、テモテ1、2、テトス)の一つです。真正のパウロ書簡ではないとの判断が学説の大勢です。「コロサイ」を下敷きにしています。「エフェソ」はもっぱら教会論に力を入れて、ユダヤ人と異邦人とが、キリストにおいて一体化することを説きます。執筆年代は80-90年頃です。パウロ後、有力な指導者だった「使徒および預言者」が絶えて、全体教会の中に一種の危機感がありました。「そのかなめ石はイエス・キリストご自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わせられて成長し」(2:20-21)などは、今までは有力な指導者に従っていれば良かったが、一人一人が自らの信仰、特に教会論をしっかりさせねばならないという状況がきている事を推測させます。パウロの教会論(共同体論)だけでは持たなくなってきたので、「キリストはすべてのものの上にある頭」として「絶大な働きをなさる神の力」(1:19)を悟るよという執り成しの祈りが、前段(1:15-19)で祈られます。後段(1:20-23)は、「キリスト讃歌」です。ここには古代世界の宇宙論「神は宇宙のかしら」(ヘレニズムの神話的宇宙論)を援用してパウロにはなかった「教会の頭はキリスト」という概念を持ち込みます。教会は個々の信徒の集まりという以前に、強力な「頭」によって「キリストの体」として形成されているという信仰です。信徒はそこに、事柄としては後から仕えるために招かれるのです。信徒がまず構成者ではありません。ここが大事です。
- 3、「見える教会、見えない教会」という思想は、カルヴァン(1509-1564 フランスの宗教改革者)です。見える教会は「土の器」として「見えない教会」普遍的、信じるべき「教会」に仕えるのが地上を旅行く教会の姿です。「教会は・・・すべてのものをすべてのものの中に満たす方の充満である」(岩波訳1:23)。「充満」(プレローマ)とは「教会を愛してそのためにご自身をささげられた、キリストの愛の事」(真山光彌)です。一人一人が自覚をもって、自分の事として教会に仕えるものになるよう祈り求めてまいりましょう。この教会も「見えない教会」につながっています。

「今日の説教、聴き手のために」 2014/3/16 明治学院教会 (330)

(このプリントは、説教ごとによって作っているものです)

牧師 岩井健作

『祈りは教会の力』

エフェソの信徒への手紙3章14節-21節。

「どうか御父が・・・その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、・・・愛にしっかり立つも者としてくださるように。」(16-17)

- 1、エフェソの手紙の著者は、パウロの名を語り(偽書)つつ、自らの教会のメンバーを覚えて祈っています。それが3章14節-21節の祈りです。この指導者は、パウロと同じように苦難を受けていました。「あなたがたのためにわたしが受けている苦難を見て、落胆しないでください。この苦難はあなたがたの栄光なのです」(3:13)と述べています。この「受苦」の系譜は大事です。古くは旧約聖書の「苦難の僕」(イザヤ53章)があります。イスラエル民族が捕囚から解放される時、その解放のため苦難を負った指導者のことです。新しくは「多くの人々の身代金として自分の命を献げるために来た」(新約マルコ10:45)というイエス自身です。そしてパウロ自身も「教会の基礎」が固まってゆく為に「偽使徒」と闘いながら、つぶさに経験した使徒としての苦勞をコリントⅡ11:16以下(新約p.338f)で綴り綴ります。伝道者・牧者というものは、黙っていても多少なりとも、そのような苦勞を経験しているものだと思います。「わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます。」(ガラ4:19)というパウロの言葉は、教会というものが、そんなに簡単に形づくられるものではないことを物語っています。このような祈りの背景を想像すると、「この箇所の祈り」は尋常の祈りではないことが察せられます。教会を形づくる基礎的な祈りなのです。
- 2、まず、「内なる人」が強められるように、と祈られています。「内なる人」はパウロの用語です。「わたしたちは『外なる人』は衰えていくとしても『内なる人』は日々新たにされていきます」(コリⅡ4:16)。有名な言葉、またキリスト者が苦難にある時に、自らに言い聞かせて励ましになる言葉です。今日の前段には「御父がその霊により、力をもって」(3:16)とありますから、外的出来事には左右されない、内的強さを意味しています。いわゆる「信念、頑固、しっかり者」というのではなく、「霊の力」という神との関係による主体性の確かさです。次に「信仰によって・・・心のうちにキリストを住ませ・・・愛にしっかりと立つ者としてくださるように。」とありますから、神との関係による主体性は同時に、人と人との関係においては、権威関係、支配関係ではなく相互主体的な関係を生み出すものであることを信じての祈りです。平たくいえば、「内なる人」が強いということは、「共に生きる」「一緒に生きる」ことに開かれた関係が持てる人だ、とうことです。「人の知識をはるかに超えるこの愛」が自分本位、自己中心(ジコチュウ)を克服するのです。「キリストの・・・」という接頭語がつかない「愛」は、「愛は惜しみ無く奪う」という、愛の名による収奪と支配の関係です。
- 3、先週「教会の頭はキリスト」というエフェソ独特の思想を学びました。教会はキリストへの回帰を願う執り成しの祈りが、密かに絶えず捧げられていることが力になっているところです。「内なる人」が強くされることを祈りつつ、この教会の歩みを続けようではありませんか。

「今日の説教、聴き手のために」 2014/3/30 明治学院教会 (331)

(このプリントは、説教ごとに作っているものです) 牧師 岩井健作

『神の国を受け継ぐ者』 エフェソの信徒への手紙 4章25節-5章5節。

「あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。」(5:1)

1、私たちが、ある人への印象を持つ場合、その人が語ったことよりも、どう振る舞ったかの方が心に残ります。かつてインドを訪問した時、マザー・テレサの名のもので行われている幾つかの施設に伺いました。ヒンズー教 75%, イスラム 15%, キリスト教 0.2%の国なのに、打ちひしがれた弱者、貧者、病者、死に行く者へのケアなどは、宗教を超えて、多くの人々の希望になっていることを感じました。キリスト教では教えも大切ですが、行為が目に見える証になっているか否かの大事さを感じました。そして教えと行為の緊張関係を生きているシスターたちの働きに教えられました。

2、「エフェソへの手紙」の特徴は、信仰の基礎と実践との緊張関係を伝えていることです。1-3章は、「教え・基礎」(特に教会論)で後半4-6章は「実践・倫理」です。その間に「執り成しの祈り」がありました。(3:14-21 先日説教参照)。その緊張は例えば「眠りにについている者よ、起きよ。死者のなかから立ち上がれ。そうすれば、キリストがあなたを照らされる」(5:14)という古代の洗礼式の時の讚美歌の引用などがよく語っています。「キリストがあなたを照らす」は「神の恵み」の事実です。「起きよ」とは呼び掛けです。「事実・真理」が呼び掛けで「現実・体得」になるのです。25節-29節「・・・真実を語れ・・・その人を造りあげるのに役立つ言葉を・・・語れ」までは、人間として生きるための基礎的倫理です(実際当時の教会では「盗むな」が語られねばならない事実があったのでしょうか)。そして続いて「聖霊を悲しませてはいけません」(30)は、旧約イザヤ 63:10の神を苦しめるイスラエルの民が思い浮かべられています。私たちが本気で人間の命を守る闘いを(最低限「十戒」の犯罪“盗まない”を犯さないの如きを)怠るならば、人間を本気で信頼して、救い(贖い)を成し遂げられた神が悲しむということです。31節の古代悪徳倫理表のような「無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしり」を「一切の悪意と一緒に捨てなさい」とあります。何かを身に付けるより「捨てる」が強調されます。これは前段「古い人を脱ぐ捨て」(4:22)と同じ単語です。「赦し合う」も極めて日常的倫理です。5章に入りますと、「(キリストの)香り(旧約のはん祭 が背景にある)」「神に倣う者となりなさい」と抽象化した語り口に続いた後で、「卑猥な言葉、下品な冗談」など生活の細部に関わる卑近な戒めが語られます。日々の生活の品位を身に付けるという些細なことが、「神の国を継ぐ」という根本的な出来事と、緊張関係に在ることが示されています。

3、聖書にはこの「促しと約束」というパターンが頻繁に出てきます。「求めよさらば与えられん」(マタイ 7:7 ルカ 11:9)は典型的な類型です。この緊張関係を生きることが、福音の現実化ということでしょう。他の言葉で表現すれば「体得契機(受け継ぐ)」と「真理契機(神の国)」の緊張関係です。「真理(教え、信条、教理)」を頭だけで把握しているキリスト者が日本の近代(知識人層を中心にしたキリスト教)には多いことが、戦後の歩みで自省されました。「戦争責任告白」(日本基督教団 1967年)などもその一つ反省の表れです。「体得(福音の現実化)契機」を大事にして、(頭と口の達者なキリスト者ではなくて)、地道に一歩一歩、日常と社会の生活を積み上げるキリスト者でありたいと思います。「神の国」は「受け継ぐ」ものなのです。「棚ぼた」でやってくるものではありません。

「十字架を担がせられたシモン」

マルコ15:21-32 (マタイ27:32-42, ルカ23:26-43)

「兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた」(21)

1、キレネ人シモンが強いて十字架を担がせられたという話は、それぞれの福音書でニュアンスが異なる。十字架刑はギリシャ・ローマの世界では最も野蛮で残酷な処刑方法であった。死刑の手順にはある種の基準があり、処刑に先立つ鞭打ち、刑場まで柱を自分で運び、両手を広げて釘付けにされ、高くあげられるものであった。刑吏の気紛れのサディズムさえ発揮される事があったらしい。この刑は政治的・軍事的処罰であり、ローマでは下層民、奴隷、暴力犯、反乱をおこしたユダヤ州の不穏分子に対する処罰であった。「すべての死刑の方法で最も悲惨であった」(ヨセフス「戦記」)と言われた。「無理に」(アッカレウオー)は公用を強いるの意味である。昔のベルシャ国王の騎馬伝令使(アッカロス)からの派生語。彼らは途上、馬でも船でも強いて使用する職権をもっていた。キレネは北アフリカのキカイナの首府、ギリシャ植民地中最大の都市の一つであった。紀元前4世紀からユダヤ人が住み始めたという(キレネへの言及は「使徒」2:10, 6:9, 13:1にある)。「田舎(原語は郊外、畑とも訳せる)からでてきた」とは、祭りの巡礼にきたか、あるいは偶然かも知れない。「アレクサンドロとルフォス(ロマ16:13)の父」とあるが、当時の読者には意味があったのであろう。ルカは十字架を「背負わせた(エピティテミー、上におく)」を用いるが、マルコは「自分の十字架を背負って・担いで、(アイロー)」(8:34)と同じ言葉を用い、イエスに従うことの神学的意味を一貫させている。

2、シモンの負った十字架は、表面的には、刑の執行を早く済ませたい実務型の刑吏と目が合った偶然に過ぎない。しかし、マルコは言外に、①シモンのように弟子たちは直接にイエスの十字架を担がなかったこと、「弟子の無理解というマルコの主張」をほのめかす。②自分の意志とは別な「神の計画」(箴言19:21)という意味をも含ませている。「無理に(マタイは踏襲)」はルカには無い。ルカは主語を「人々」とする物語りにしているので、シモンは受難物語の一つの風景でしかない。しかし、マルコはイエスの処刑死という出来事に、自分のスケジュール表にない予定外の「十字架を担ぐ」ことが起こることの証しとして、シモンを登場させている。

3、この物語りにまつわるエピソード。①鶴見俊輔「自分の主題の発見には、道草が一番だ」。シモンも好奇心から人だかりを覗きイエスの十字架を負う羽目になった。彼の人生では道草だったかも知れない。しかし、彼の名を今私たちは覚えている。②神戸教会伝道師だったTさん。クリスマスの重い樅の木を、六甲山系の山から切り出し市内の教会まで担ぎ降りるといふ彼の人生にとっては偶然の出来事に、キレネのシモンを心に刻んだという。後々この事は彼の牧会生活に深い意味を持ったと言う。

「土の器」

コリントの信徒への手紙二、4章7節－15節

「ところで、この宝を土の器に納めています」(7)

1、著者パウロはコリント教会で大変苦勞をします。敵対者が「キリストの十字架の福音」を受け入れなかったからです。しかし、落胆しません。回心前のパウロは律法を「落ち度のないように」頑張る生き方でしたが、今は「十字架の死」に自分本位を結び付けて自分が「死んで」、唯ひたすら「恵みに受け入れられる」生き方へと転換をしたからです。「あわれみを受けてこの務め(使徒)についている」(4:1)と言っているように、困難に出合っても道が開かれることに希望をもった生き方です。「イエスの死を体にまとっています」(4:11)というのは、自分本位に戻る危うさを持つ弱い生身を自覚していることです。ありのままの絶望的な自分が神の恵みを証ししている喜びです。だから「弱い時にこそ強い」(12:10)と言えたのです。

2、その弱さと強さ、死と生の両方を同時に表す言葉として、彼は「土の器」という言葉を用いました。もう駄目だ、と嘆く弱い面と、それでも用いられているという肯定の面です。しかし、それは独りよがり「そう思い込むこと」ではありませんでした。「わたしの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いている」(4:12)と言っているように、パウロが自らの「死」を自覚するのは、どうにもならない相手と向き合い、相手をやっつけてしまうのではなく、どうにもならない交わりの関係にこそ「死」を受け止め、相手がなお生かされていることを信じるという際どい場面においてでした。「神が・・・あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしは知っています」(4:14)と述べ、最後を「神に栄光を帰すようになるためです」と締めくくります。「土の器」は教会における彼の姿なのです。

3、「土の器」とはいい言葉です。「キリストの死」に結びつく契機となる「弱さ、脆さ、絶望的はかなさ」を表す反面、金銀ではない日常用いる土器(陶器)を表しています。その「土の器」に「宝」(「並外れて偉大な力が神のものである)を持っていうのです。注目すべきは「器」が複数形であることです。交わりのなかで発揮されている彼の様々な個性です。個性は関係のなかでの人間性です。キリスト者の作家阪田寛夫氏の作品「土の器」(芥川賞受賞1974)は、母の死を多くの人々に囲まれた証しの人生として描いた作品です。

4、多くの人々に親しまれたキルケゴールの研究者飯島宗享さんからの言葉を時折噛み締めています。肺を患い人並みには歩けない方でした。「おもむろに歩みたらずみて息をととのえれば、路傍の草木が息づきて迎えてくれる」。最近私も、骨折でバイクを止めて、ゆっくりゆっくり杖をつきつつ歩いています。道々多くの草木、大小の花々が迎えてくれて、それは私を囲む多くの人たちを想像させてくれます。

「目が澄んでいれば」

マタイによる福音書 6章22節-23節

「目が澄んでいればあなたの全身は明るい」(22)

1、保育者の養成校で学生に「保育者の目-3つの働き」というお話をした事がある。

第一は、客観的な目、全体状況を見る目。観察する目、「3人称の目」である。子育ての母親にも必要な目の位置であろう。第二は、「向かい合う目」。子どもへの愛情のまなざしである。子育ては目八分、口二分と言う。「2人称の目」である。第三は、「自分が自分を見つめる目」「反省の目、内省の目」「1人称の目」である。しかし目の働きは時として二つの領域、あるいは3つの領域にまたがっている。

2、さて、マタイ福音書は、「目が澄んでいればあなたの全体は明るい」という。前後に「天に宝を積む」「神と富」があるのでお金にまつわる目移り、貪欲、こだわり、思い煩いをするなという意味になるが、本来はそうではない。山上の説教全体から言えば「神の国と、神の義を求めよ」(6:33)を意味しているであろう。「神に対する従順さに関しての誠実さと正直さをいみする」(ルツp.517)。「澄んでいる」は旧約では「二心のないこと」「気前のよい」(箴言11:25)などと用いられ、新約ではパウロが「物惜しみをしない」と施しに関連して用いている(ロマ12:8)。私は、この語が持っている根本^的な意味に注目したいと思う。「根本の意味は「単一」あるいは「全体」である」(釈義事典I p.158 haplous)。つまり、目の働きには様々な面があるが、それが相互にその特徴を活かしながらかつて関係づけられて、全体として、「単一な働き」(全人格的働き)としてまとまっていることが大事であるという意味に受け取っている。

3、さて、キリスト者の「目」は如何あるべきか。3人称の目は、「歴史認識」「状況把握」「長い目、広い目」である。歴史の文脈で、物事を見る目である。3人称の目を全く持たなかったら、信仰生活は、とても主観的になって、世の中がどっちへ動こうと、内にこもれるキリスト者になってしまう。社会、世界、隣人のことなど関わらない信仰者とは如何なものか。2人称のめ目は、行動の目である。わたしたちの行動は、誰かに促されて、また、誰かと共に、誰かのために、誰かを覚えて、という事で起こされる。教会が社会的行動を必要とするのは、神の救いは、「共に生きる」という、イエスを遣わして御自身を現されたという福音の根本的構造による。神は行動する神である。「1人称」の目は、神の前に悔い改めをして、懺悔をし、感謝してゆく信仰生活の基本である。この3つの目のありようが、相互に関連し、一つになっている全体を「目がパブルス(澄んでにる)」だと表現しているのがこの箇所である。「だれにでも惜しみなく(ハブルス)・・・お与えになる神に願いなさい。」(ヤコブ1:5)は、神との関わりの身近さを覚えさせる。「惜しみなく自らを与える神」に「澄んだ目」で応答をしてゆきたい。「澄んだ目」は信仰の成熟を表す。

「夕べがあり、朝があった」

旧約 創世記 1章1節－13節

1、創世記1章1節。聖書の一番始めの言葉です。ここを読むと、どうしても思い出すお話があります。同志社大学を創設した新島襄は海外脱出の最中、この聖書の言葉に出合って、価値観を「軍事力」から「聖書(キリストへの信仰)」に転換しました。

2、キリスト教の信仰の中心は、神がイエスによって自らを「救いの主」として表されたという「キリスト論」にあります。が、「天地の造り主(創造者への信仰)」は、それより古くからの信仰です。初代教会の伝道も創造者を伝えることが中心でありました(使徒言行録14:15-17 p.241)。キリスト教の理解にはいろいろな面があります。キリスト論、贖罪論、教会論、人間論、終末論、創造論。創造論は最も古いものです。創世記のはじめの、ヤハウエ(J)資料(創2:4f)、祭司(P)資料(1:1f)の二つの資料に天地創造の物語があります。今日読んだ祭司資料は紀元前6世紀ごろまとめられたイスラエル民族の世界観と言ってもよいかと思えます。

3、今日は6日間で神が天地を創造された物語の区切りに6回記されている「夕べがあり、朝があった」というリフレイン(くりかえし)に注目したいと思います。神は天地を創造されると同時に繰り返しのリズムを創造された、という視点です。

4、私たちの生活で、朝・夕、春夏秋冬、というリズムは生活のにとって、とても大事です。「子供は9時まで寝かせて欲しい」とは、ある小児科医の切実な声でした。幼児はリズムの中で育つからです。

5、「光」と「闇」のリズムは、そうして6日の労働と7日めの神の安息が祝福され、聖別された(創2:3)という出来事を象徴するからです。教会は、これを象徴的に、あるいは日常的に繰り返すために日曜日に礼拝を持っています。これは、「神がイエスにおいて十字架の死を負い、罪の贖いの愛の実現を成し遂げ、それを安息日の朝の(マルコ16:11)復活に出来事以示した」という福音の内容を表しています。終日の労働と日曜の礼拝とは、福音そのものをしめす繰り返しだからです。いつぞやは、ギャザードチャーチ・スキタード・チャーチ(集められた教会・散らされた教会)という表現で表しました。その繰り返しのリズムが大事なのです。

6、三浦綾子さんの小説に「夕べがあり、朝があった」という作品があります。クリーニング店を創業した五十嵐健治の伝記小説です。人生を、信仰に生かされたリズムとして描いているところが読みどころであります。

7、パウロの「夜が更け、日が近づいた」(ロマ13:12)は、彼が創造物語を念頭においていたと思われまゝ。闇は闇のままではない。恵みのリズムがあって、新しい朝へと必ずむかわしめられる。「うるわしき朝も、静かなる夜も・・・」の子供賛美歌のように、神のリズムのなかに生かされていることを忘れまい。私も少年の日、農村教会で与えられた恵みは「神のリズム」に要約されるような気がしています。

『福音は、弱さと共にあずかるもの』

コリント一、9章19節-23節

選句 「わたしが福音に共にあずかる者となるためです。」 (23)

1、私どもの教会が祈りに覚え献金している団体の一つに「日本キリスト教海外医療協力会」(通常JOCs)があります。今、アジアに49名の看護師、医師、理学療法士、助産婦、奨学生を派遣しています。その地域の弱い人達と共に福音に与かる働きをワーカーの方たちはしています。

2、今日の聖書の箇所、パウロの言葉、「わたしは、だれに対しても自由なものですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。」(9:19)とあります。これは逆説ですが、この背景には、コリント教会の一部「知識人」信徒の教会内での「自由を標榜する」、身勝手な発言がありました。冷たい言葉を投げ掛けられたのは、決して社会的に強いの人達ではありませんでした。最下層に属し、また「奴隷」の身分に属しつつも、実直な信仰を生きていた信徒達です。「兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを思い起こしてみなさい。人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけではありません」(1:26)と言われた教会の構成員です。

3、彼らは、日常食用に食べるお肉が、当時の習慣でアフロディティの神殿に備えられてそれが払い下げられて来たので、偶像礼拝に捧げられた肉は食べないと言ったのです。ところが、福音を知的に理解していた人は、「もともと偶像なんていうものはないのだ、天地にはただ1人の創造の神、イエスの父なる神がいますことははっきりしている、神殿のお肉をたべたからといって実際に汚されることはない、大体、神殿からの肉を食べないなんていうのは、信仰の知識がまだたりないのだ」「あなた方は自由が分かっていないのだ」とまで言いました。パウロはこれを8章と9章で戒めています。素朴な信仰の人達が、神の愛に繋がっているとすれば、その人達と繋がるために、敢えて「奴隷になろう」とまで逆説を語り、「頭だけの(強いと思っている)信徒」を戒めました。福音は、弱いものと共に与かるものなのです。パウロの言う「人を得るため」(ケルダイノ)は内容的には、共に神の与えるよろこびに繋がることを意味します。

4、「サンガイ・ジュネイ・コラギ」「みんなで生きるために」は岩村昇医師(1927-1980)が日本キリスト教海外医療協力会よりネパールに派遣されて医療活動を行った際、遠いところから病人を連れてくる村人から聞いた言葉です(参照『山の上にある病院』1965年)。彼は、何故ネパールに行くのに対して、「そこにキリストがいるから」と応えました。貧しく弱い人々と共に福音を受け取って行きたいと思います。

『言葉が力を与えられる時』

ヨハネ14章25節-31節

「わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(26)

- 1、イエスの言葉には人を動かす力がありました。「その教えにひどく驚いた。それは律法学者のようにではなく、権威(エクスシア)ある者のように教えられたからである」(マタイ7:28)。例えば「あなた方は地の塩・世の光である」といわれ民衆は、生きている価値を自覚し元気が出たのです。その言葉も、イエスの死で過去のものとなってしまいます。過去の言葉がなお力をもったのは、そこに人格の関係が今もあるからです。その関係の背後には見えざる「神の力」があるからです。
- 2、今日のテキストの「これらのことを話した」(25)は生前のイエスの語られた言葉を意味しています。それらが弟子たちの現在になお力を持ったのです。それは過去が現在に生きているからです。森有正氏(1911-1976 哲学者『遥かなるノートルダム』)は、氏独特の用語法ですが、人はあることを体験したままでは、それはやがて過去になる。しかし、「体験」したことがもし「経験」になるなら、それは現在の力となる、と言っています。イエスの言葉も、それぞれの人生の「経験」となる時、新たな力となるのではないのでしょうか。私たちが、信仰生活の中で「御言葉に生かされる」といっている出来事です。聖書の言葉が今の生活の文脈に生きて働く経験です。例えば「苦しむ事も恵として与えられている」(フィリ1:29)に、励まされて経験が得られるでしょう。
- 3、ヨハネ福音書はその出来事を「助け主」即ち「聖霊」(14:26)の働きだと解説しています。「わたしがはなしておいたことを思い起こさせる」という言葉です。神学者ポーレンは「聖霊とは、言葉を与えるものだ」と言っています(使徒2章など参照)。聖霊はイエスの言葉を過去のものとして理解させるのではなく、言葉を現在の力として働かしめる(想起させる)ものだということです。
- 4、「聖霊を受ける」ことで、私たちは、イエスの出来事を大胆に再解釈し、現在化し、経験化させられるのです。例えば「思い煩うな」は、重い現実を相対化します。それは自分の言葉をもつことです。その時、人は27節のごとき「平安」(心を騒がせない生き方)を持つてありましょう。「助け主」はその事を起こさせます。聖霊は私たちの側の意識を越えて、神が働きかける関係です。別の表現では、イエスが共にいます安らぎです。言葉が力を持つのはその証しではないのでしょうか。
- 5、「疲れたでしょ」。これはむしろ病人に父から発せられるべき言葉でした。だが、これが父への彼の最後のことばになりました。先天性の心疾患、4才での大手術、併発する癲癇を抱えて酪農大卒業までの学び、輸血によるC型肝炎から肝臓癌、病気を隠さないで済む共働学舎での生活、ホスピスで終わる44才。『独立教会教報』(328号)でY. Kさんの、葬儀・追悼号を読みました。人生最後に力のこもった、身近な者への労りのある自分の言葉を発するYさんのその生き様に感動させられました。

『関係、そしてその自覚』 マルコ13章32節-37節

「気をつけて、目を覚ましていなさい。」(13)

1、人間は関係存在である。このことが分からないというのでは困る。谷川俊太郎の有名な絵本作品に、『わたし』がある。主人公はやまぐちみちこ5才。「おとこのこからみるとおんなのこ」「おかあさんからみると、むすめのみちこ」「がいじんからみるとにほんじん」・・・「御医者さんからみると患者」「お店にゆくとお客さん」・・・小さい子も、人はいろいろな関係で自分を自覚する。

2、人間の関係には大きく2つの流れがある。第一の流れ。非人格的關係(物との關係)、利益社會關係、力の關係(地位[権力]、金力、武力、△三角構造)、観念的關係。第2の流れ。人格的關係(人との關係)、共同社會關係、平等の關係(差別をしない、○丸構造)、実践的關係。實際の生活を包んでいるのは、第一の流れである。しかし第一の流れだけでは、生き生きした人間らしさが失われる。そこで第二の流れとの間に葛藤が起きる。第二の流れから、第一の流れを、どれだけ相對化出来るかが問題である。そこには価値観の選択、心と現實との間の闘いが生じる。

3、今、物事を非常に単純化して考えてみることにする。第一の流れを「お金の支配」に象徴させたとする。第二に流れは「命の充実」だとする。多少図式化を我慢すれば、聖書に描かれた歴史を振り返ると、「お金」(旧約ではバアルの神。新約では富)と「命」(ヤハウエの神、契約の神、イエスがもたらした命)との攻めぎあいの歴史が見えてくる。その攻めぎあいで現実に苦しんだのは、預言者たち(参照マタイ5:11-12)である。イエスはこの攻めぎあいで十字架に付けられて殺された。しかし、その死が、それで終わりではなく、その死を通さなければ見えてこない「出来事」を、弟子たちは「イエスは生きておられる、復活した」という信仰(福音)で生きた。そして後々の教会は「歴史の主」「神の宣教(ミッシオ・デイ)」という信仰で、現實の暗さ・重さ(罪)の中で「目覚めている」(赦されている)生き方を呼び覚まされて生き、働いてきた(宣教)。

3、マルコ福音書が書かれた当時の教会には「熱狂主義者」といって、世の終わりはもう間近にくる、と言って毎日の足下の生活を疎かにした、浮ついた一群の人々がいた。信仰を持ちながら観念的で、現實を見つめない人々である。信仰を標榜しながら、「第一の流れ」に呑みこまれた。そういう人々を念頭において「目を覚ましていなさい」と呼び掛けたのが、マルコである。「お金」から「命」への闘いを自力でののではない。イエスが共にいまして、私たちに絶えず命の關係へと呼び覚まして下さるのだから、慌てることはないという信仰である。約束した友達の訪問の到来を待つのは「うきうき」するものだ。「その時がいつかわからない」。だから謙虚でありたい。

『恵みを心に刻む』

マルコ4章1節-9節

「また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び・・・」(8)

- 1、今日は、新約聖書の中でも良く知られたイエスの譬え話「種を蒔く人」から、学びます。
「種を蒔く人」はフランスの絵画ミレーの代表的作品にもなっています。農民の父を思い浮かべて1850年に描いたものですが、背後には聖書のこの場面があります。岩波書店は店のマークに、彫刻家・詩人高村光太郎のレリーフを基にした「種を蒔く人」を用いています。また、小牧近江はプロレタリア文学の同人誌に『種蒔く人』(1921)と名を付けました。「種を蒔く人」は日本の文化に溶け込んでいます。
- 2、イエスはまず、人々の生活の経験を大切に温めつつ教えます。種蒔きは農民の生活そのものです。種が蒔かれて実を結ぶまでには、いろいろな出来事があります。道端で鳥に食われた種(単数形)、石地に落ちて根が伸びずに枯れた種(単)、茨の中に落ちて実を結ばなかった種(単)、そして良い地で多くの収穫となった種(複数形)は、一つの物語です。日常生活の苦労や喜びの全体を含むのが物語です。そこには生活そのものの肯定があります。神の福音は、ありのままの「種蒔く生活」が神の恵みとして覚えられています。物語の全体が「恵みの出来事」として語られています。「種が実を結ぶ」そのことは、「生」「生きること」「命」の肯定です。しかし、そこには事柄の順序があります。「苦しいこと」「悲しいこと」「辛いこと」があって「そして」「また」収穫という喜びがあります。「収穫感謝」は実を結ぶまでの全体の恵みへの感謝なのです。NHK「朝ドラ」の「マッサン」も「ウイスキー造りの成功」との結論は誰にも察しがついていても、ハラハラする出来事が次々に起こり、「そして」その次の日もドラマは続きます。「そして」全体がドラマです。
- 3、この譬えの物語りの原文には、「そして、and(原語はkai)」という接続詞が21回用いられています。「朝起きて、そして顔を洗って、そして御飯を食べて、そして学校へ行きました。」という小学生の作文のように、「そして」が用いられています。新共同訳では、「そこで」「しかし」「また」「すると」「そして」と5回しか訳していません。田川建三訳では「そして」を15回訳しています。そこには、日常生活の時の流れが描かれています。鳥に食われた種も枯れた種も結実しなかった種も、実を結んだ種も並列で、物語に組み込まれています。いわば、我々人生の出来事の波風、嵐、平穏を含めて「そして」で繋がれています。「苦難」があるが、「だがしかし」ではなくて、「そして」恵みがあるという言い方に注目したいと思います。「恵み」は併記された負の事柄を含めての全体を言うのです。もちろん「実を結ぶ種」(8)に強調点が置かれていることは確かです。しかし、物事を繋いだ全体が「恵み」の出来事であります。だから毎日「そして」「そして」とたどるような出来事の連鎖をこそ、恵みとして心に刻みつつ歩みたいと思います。

『夜は更け、日は近づいた』 ローマ13章11節-14節

1、「夜は更け、日は近づいた」いい言葉です。しかし、言葉の響きの重さが自ずと「夜は更け」にかかっている自分に気が付き愕然とします。今日12月14日。「総選挙」の結果はもうほとんど“権力”によって方向づけられていて、メディアが伝えるように「“日本国憲法” 明文改憲路線」(米国に追従して戦争が可能な国への明確化)が圧倒的勝利をするだろう、という状況がのしかかっているからです。「戦後民主主義」の「葬儀」に臨席しているような気持ちです。でも、この聖書の箇所は、「日は近づいている」の響きのゆえに、アドヴェント(待降節)の教会暦テキストに選ばれているのです。「あなたがたが眠りより覚めるべき時がすでにきている」(11)という覚醒を、ローマの教会の信徒たちに促す、著者パウロのこの書簡の最も大事な部分です。

2、「ローマの信徒たち」はローマ帝国の支配秩序・価値観から自由な主体として、ナザレのイエスの福音を信じ「信仰に入った」(11)のです。しかし、しばらくすると、元の価値観に生活ぐるみ絡めとられました。そのローマ社会の現実を著者は3つの次元で描写します。①「酒宴と酩酊」(酒の神バッカスへの祝宴。現実逃避と自己陶醉)。②「淫乱と好色」(社会秩序保持のための「神殿娼婦」、現代の「性産業」、日本軍隊の「従軍慰安婦」問題の類い)。③「争いとねたみ」(権力構造の裏側、競争や格差の社会、弱者切り捨て)。パウロはここからの脱出を「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」(3:23-24)と解き明かしてきました。ヨハネ文書の表現では「神の愛」(3:16)ということです。この初心に帰ることが「眠りから覚める」(11)ことでありました。

3、「覚める」を12節は「闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう」といい、13節では「主イエス・キリストを身にまといなさい」と、実践的行動への促しを語ります。12節は「洗礼式の用語」。「キリストを着る」は、ガラテヤ(3:27)、コロサイ(3:9-10)、エフェソ(4:24)、にも出てきます。元来はローマの蜜儀宗教での神との神秘的結合を示す用語ですが、その用語を用いて語っています。「馬子にも衣装」という諺があります。イエスの生き方への「模倣」が「毎日」を救うのです。実践訓・方法を身に着けた時、「暗さ」を脱することができるのです。

4、11節には「時」が二つ使われています。初めは「カイロス」(知ってる時、救いの時)。次は「ホーラ」(覚めるべき時、行動の時)。行く先の決まったバスに乗ったのは(カイロス)既に事実です。降りる時に目覚めているようなもの。「日が近づいた」とは降りる時の接近を言っています。「居眠り」に注意して、活かされている者の自覚を、そして各人に与えられて役割を、淡々と生きてゆきたいと思います。